

麻生路郎★主宰

の  
雅

川

証

柳

九 月 號

Pensoj flugas trans la land-limon

# 川柳雑誌・九月號目次

表紙 (路郎主幹の題字) ……

水と馬鈴薯……………麻生 路郎……………(一)

雑草と江口と休閒地……………西田 紳樂……………(二)

武玉川研究(一三)……………梅本 康山……………(三)

語源 覺書(九)……………森 東魚……………(四)

初等川柳講座(一三)……………浅田 一……………(五)

陣中川柳……………没食子……………(六)

北支征破回顧斷片……………加川 泉泡……………(七)

評作品二三……………路郎 亞純 統人……………(八)

一木一草……………紫香 香林 幽王……………(九)

★

近作柳……………路郎 生……………(一〇)

川柳塔……………麻生路郎選……………(一一)

同舟近詠……………諸 家……………(一二)

一路工場街……………水谷 鮎美選……………(一三)

集安産……………濱田久米雄選……………(一四)

各地柳壇…………………………(一五)

川協・柳界展望……………廻轉椅子……………(一六)

社關係の人々…………………………(表三)

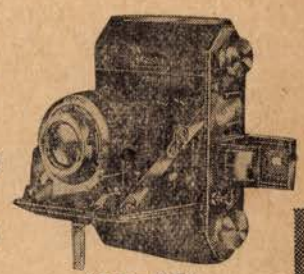
食生活  
住生活  
衣生活

へ反省せよ!

必ず  
二百七十億  
を生み出せ

## タニタニセ

代表的國産カメラ



プロニー  
16枚撮り  
II型 F4.5付 ¥117.00  
F3.5付 ¥141.00  
距離計 ¥21.00

(カタログ呈 郵便券十銭)

## 浅沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目  
電話船場905・1905・1396・5095番

## ガラス壘代用

# 紙容器

金屬代用紙罐  
紙コップ



丸形・角形・小判形・  
組立式各種・薬品・食  
料品・菓子等の容器と  
して最適

## 二葉屋商店

大阪市阿部野區晴明通一丁目四〇番地

電話事務所 天下茶屋(五八〇〇三番)  
工場用 五八〇〇四番

# 兵隊さん！あがりうた

## 水と馬鈴薯

百幾十年前に、ハンガリーに、言語學者で數學者を兼ねた Mentelli といふ人があつたが、別にこれといふ目的もなく學問を樂しみ、その知的慾望を充たすために一生を捧げたに過ぎなかつた。彼はパリーの下等な宿屋にゐた。それも慈善的に貸されてゐたものだといふことである。

彼は絶対に必要なものの外は何一つ購めなかつた。本代をのぞいての彼の生活は一日僅に七スルーであつた。そのうちの三スルーが食費で四スルーが燈料だつたそうである。彼は一日二十時間連續的に讀書をし、一週に一日數學を教へて、それで少額の生活費を生み出してゐた。従つて彼の必要としたものは水、馬鈴薯、油、粗末な褐色のパンの四品に過ぎなかつた。

彼は大形の荷物函を部屋の中に置いて、晝は毛布や藁で包んだ足を入れ、夜はこれをベッドにした。彼の所持する道具は古びた背掛椅子と、食卓と瓶と錫壺と錫の片であつた。彼は洗濯代を節約するためにシャツを着なかつた。兵士の着古しと南京木綿製の股引と毛皮の帽と巨大な木靴が彼の衣類のすべてであつた。一八一四年、聯合軍の砲彈がその宿の近くに落ちたが彼は立退かずに讀書し續けてゐた。

パリーにコレラが流行した時に彼の不潔な部屋に清潔法を行ふために、その讀書を中止させやうとしたが、その命を用ひないので、武力で斷行した。それほどにして彼は一意専心、何の不平等もなく、三十年間に一日として病氣もせずに生存したが一八三六年十二月二十二日に、いつものやうに、セーナ河に水を汲みに行つて、水當の増してゐる河中に落ち、溺死をしてしまつた。

彼は著書一冊公にすることをしなかつたので、多年の研究も彼と共に消え去つてしまつた。以上が Mentelli の生涯であり、しかも極端な生活をした人の例であるが、現在捷ち抜くための戦時生活の渦中にある私たちとして彼から學ばねばならないことと、排撃しなければならぬことの幾つかの問題があらうかと思ふ。第一に彼は個人主義であつた。社會生活を無視した。彼は社會からうける恩恵について考へやうとしなかつた。彼の研究は無害無益に終つた。斯うして列擧する時に、お互ひはお互ひの生活から、この方面の思想の一片の存在も容さないやうに排撃しなければならぬが同時に彼が二十時間も連續して讀書した精力については大いに學ばなければならぬ。しかも極端な粗食で堪え得られるといふ實例を示して呉れてゐる。カロリーがどうの、ビタミンがどうのと云ふ説は科學的眞ではあらうが、必ずしも超精神的生活の眞ではない。一事に没頭するためにあらゆるものを犠牲に供したことも彼から

學ばねばならないことの一つであらふ。しかし彼の生活は消極的であり、非文化的であり、非協力的である。彼自身にとつて、それは幸福な生活であつたかは知らぬが私たちは斯うした生活に奮動してゐる人間の一人の存在をも容すことの出来ない今日の日本であることを想はねばならない。

メンテリーはインテリではあつたが、目的らしい目的を持たなかつた。學究らしい最低限度の名譽慾すら持たなかつた。それがために、著書の公刊ともならず、社會への貢獻に何等寄與するところがなかつた。然し、今日の日本人は、誰も彼もが捷つためといふ大きな目的を持つて戦時生活をしてゐるのであるから、その點から云へば實に生き甲斐のある生活である。

敵米英を壓倒的に征服するためには、卓絶した兵力に據ることは勿論であるが、兵器の量的充實が第一でなければならぬ。斯く考へる時に、私たちのうちで、直接増産に携はらないものは、石に嚙ちりついてもと云ふ例へもあるからメンテリーの採つた水と馬鈴薯の生活へ進むのも一つの方法ではあるまいか。

麻生路郎





# 雜草こ江口こ 休閑地

西田 艸樂

喰べられる雜草の川柳會が催されるといふ決戦段階の我が國である。併し有難いことには我が日本では今尚ほ世界交戦國のいづれよりも食糧に恵まれてゐる。

この夏なぞは野菜類の出廻りが多過ぎて、街の配給所と家庭が、その多過ぎる野菜を巡つてもめる状態さへ現出した。就中茄子と胡瓜の洪水には、いかな大阪でも消化しきれぬ程であつた。だが、今日世界の何處の國に食糧が多過ぎて困るなんて處がある。こんな大戦争中に如何に多過ぎるといつたつて、茄子一つ胡瓜一本粗末にしてはならないのである。だから先般來配給所と町會の經濟部と家庭が多過ぎて困る野菜類を中心に問題が起りそうだったので、町會の婦人部の幹部どころを集つて貰つて野菜の有用な消化方法と貯藏法に就て一場の口演

をしたのである。その翌日から問題が夕立の後の空のやうに拭ひ去られたのを愉快に思ふ。

一時的に野菜が多過ぎるといふ現象を以て決して食糧問題を甘く見てはいけないのである。いづれ食糧不足は免れぬものとして國民の覺悟を要すること萬々である。だから例の雜草食なんかも決して好事家のすることゝ見てはいけない。先般、大政翼賛會の大阪府支部から呼ばれて、なるべく實際に近い、雜草の喰べ方と大阪を中心とする區域の食用野草に就て少し書いて見たくれとの御依頼があつたので、少々自分の實驗濟のことを書いて差出した所、御町重な謝狀を添へて謝金が届いた。これしきな努力に對して頂戴すべきでないと思つたのであるが、既に小切手で振出されたお金で、いづれ澤山なお返しかれたことだらうからお返しするのは却てお手數だらうと思ひ、難有頂戴したが丁度今大阪市内とその附近の食へる野草の自生状態を調べかけてゐるのでその費用に充當することに於て、餘暇を作つては調査を進めてゐる。時恰も、或る知人が郊外に

少し地面を遊ばせてゐるから雜草園にでも藥草園にでも、時局に役立つ方法で使ふなら償ひは要らぬといふ申出に、

耳寄の話だから一度場所を見せて貰ふといふことになつて七月末の某日、その地面のある農村といつても市内になつてゐるが、そこで落合ふことにきめた。その場所といふのが有名な昔の水郷江口の里である三千某といふ老農家が管理してゐるのでその家で地主と會ふ約束で、私は約束の間より少し早く出かけた。それはまだ江口を知らなかつたから少し探勝氣分で歩いて見たく、歩を運んだ。新大阪の上新庄で下車して、昭和商前、瑞見寺前などを通つて、驛から二キロあまり淀川に向つて歩くと江口の村があつた。村のはづれで、こゝらが昔の淀川の舟着場として賑つた所かと想像すると、此の一部落のあまりにも淋しい靜かな農村に變り果て、昔を語る遊女宿らしい一軒の建物もなく、あたりは青い稻田と遠近に何の工場か黒い煙を吐いてゐる煙突や工場建の建物がちらほら見えるが、他で見る農村と變つた所がない。江口の君の遺跡を人に尋ね

ると、そこのお寺で聞いて見ると教えてくれたので、往來をたら／＼と下りると、古いあまり大きくない本堂とそれに續いた庫裡のある一寺院があつて、私はその境内に入るや直に突當りの本堂の前に立つて一禮してからあたりを見廻すと、君堂と刻つた石の手洗、西行塚、君塚と書かゝれた碑を發見した。こゝだな！と獨言して、ゆる／＼尋ねて見ようと一休みすべく本堂の階段に腰をかけて一服火をつけたが、先頃から悪るかつた空模様俄かにかき曇つて強い風と共に沛然と夕立が降つて來た。

庫裡から四十恰好いや今少し若い、一人の尼様が現はれたので、こちらから會釋をしたが、相手が僧形の女、こちらが半ズボンにカッターシャツの男、雨が降つてはるるがとても時雨西行の圖になるどころか、尼さんは「吸殻をそこらに捨てぬ様に頼みます」と無愛相に言つて内へ這入つてしまつた。黒染の衣を一着した西行法師が、この里で時雨に會つて泊らうと思つたのだが、美しい教養のある遊女江口の君が僧形の彼を見て泊めることは

出來ぬと斷つたのである。西行は世の中をいとふまでこそかたからめ飯のやどりを惜む君かなと一首を詠んで立去らうとする、女が

世を厭ふ人とし聞けば飯の宿に心とむなと思ふばかりそとかへしたとこが、時雨西行の主題となつてゐるのだが、これは又時代が變つたとは言ひながら此の昔の名勝をとゞむる里で、私と寺の尼さんでは、さても／＼無粹極まる對談になつてしまつたのが、むしろ當然とは言ひながら、むしろ苦笑を禁じ得なかつた。でも、夕立がやがて小やみになりかゝると前の尼さんが出て來て話した。君さんのお木像が本堂に安置してあるが春四月と秋の彼岸のほかお開扉をせぬのだといふことゝ西行塚、君塚の石塔など教へてくれたりして、村の三千某の家もそこだと、まだ小雨の降つてゐる中を出て教へてくれたりした。此の寺は西行が遊女の姿に生身の普賢菩薩を拜したといふ述懐から、普賢院と名づけられる。三千といふ家について暫くすると、「ひどい夕立で途中



中陣

語源覺書

(九)

淺田 一

に雨宿りをして遅くなりまし  
た」と地主の人が見えたので  
三千老と我々二人、三人連で地  
所を見に行つたが、地面は四  
百坪あまり、近所に住んでゐ  
る人達が所謂休閑地農園をや  
つてゐて、少しもあます所な  
く、茄子、大豆、南瓜、サ、  
ゲなどを作つてゐた。今直ぐ  
これを取除さすといふのは、  
いくら無断で作つてゐても氣  
の毒だ。今作つてゐるものは  
すつかり收穫させて、この秋  
ごろからでも利用することに

して、作主達へ前以つて通告  
を三千老に頼んで置いて我々  
達はそこを引揚けた。新京阪  
の吹田驛へ出る方が道がよい  
ので、道々例の食用野草を檢  
べたが、このあたりでもアラ  
ビユ、アカザ、カツヂサとい  
つたものが非常に多く、殊に  
早春摘草などに來れば、今改  
修工事中の神崎川畔から、此  
の邊一帶の田園の畦などはい  
ろ／＼と收穫があらうと思は  
る。草々の詳細はいづれ發表  
すべく手帳に控へて來た。

水(ミヅ)は朝鮮語ムルと  
同源である。その發音は日  
と變ること珍らしくない。  
恩師故片山國嘉先生が洪牙利  
へ旅行された時非常に歓迎さ  
れ、日本語と洪語と似たのが  
ないかといふので色々云ひ合  
はれた時ミヅと云はれるとそ  
れは同じだ洪語ではミダと  
云つたさうである。其アクセ  
ントや音感が水と酷似してゐ

中陣 中川柳

誰可する

歩哨の聲が

錐に似る

没食子作  
宰二郎書

闇夜に虫の動きも見  
遁すまいとする哨兵  
の全神経は尖る。

(路)

たさうである。ロシアやスラ  
ヴ諸國ではウォーグといひ、  
英語ウォーターに似てゐる。  
獨語ではワツサーとなる。之  
からワツシエン(獨)ウオツ  
シユ(英)即洗ふといふ語が  
出てゐる。かう見るとミヅと  
ワツサーとも同祖であつたか  
と思はれる。アイヌで水をナ  
河をナイといふ。カハは河の  
音らしい。ウミは大水、ウチ  
も亦然り。

洗 マライで水をワシ又は  
ワツシユといふ。ワツサーから  
ワツシユとなる様に此アイル  
からアラフが來たのでなから  
うか。マライでは洗フはラブ  
安南でラウ、カムでアラウ、  
泰でランといふのはアラフと  
同源らしい。洗ひ好きの民族  
の語を「洗フ」で採つてゐる  
のも妙である。

雨 ニコバル語でアミー、  
スチエング語でミー、安南で  
ミヌア、センデングでメーと  
いふさうである。アイヌでも  
小雨はメニである。水と同源  
でないかと思ふ。アマツミヅ  
(天水)の略と云はれるが天  
とは別系と思ふ。或は逆に雨  
から雨の降り來る處をアメ、  
アマといふに至つたのではな  
からうか。天から水が降つて  
くればア、水だと誰しも思ふ  
であらうからアミとなりアメ

と轉呼されるに至つた。天水  
桶といふのは雨水を湛へてあ  
る筈である。

浴 南洋でスコールの時浴  
びる様に雨水で昔は浴びたの  
でなからうか。アメのモトの  
コトバなるアミを活用させて  
アミル又はアビルとなつたの  
でなからうか。泰語で浴びる  
をアープといふのは同源かも  
知れぬ。

若水 梵語、羅典語でアカ  
といふから佛様に供へる水は  
アカであるが、アイヌ語では  
偶然か水をアツカ又はワツカ  
といふ。稚内だの阿賀野だの  
和歌の浦などのワカ、アカは  
アイヌ語の水の義である。正  
月元旦の水をワカミヅといふ  
のも若い水でなく、ワカなる  
水即佛様神様に先づ御供へす  
る水の意らしい。

湧く 温泉や鑛泉のワキ出  
ルといふのも此のワカから來  
てゐるかも知れない。岩や土  
を分けて出て來る義かとも考  
へられる。西藏でチユールとか  
支那のスイとか、トルコのス  
1とかは同源である。西藏で  
水をツアブともいふ。之等は  
水を動かす時の音から來てゐ  
るのであるまいか。日本でも  
チャブ／＼とかス、ルとかス  
、グとかソングとかいふのは  
水の音から來てゐると思ふ。



# 川柳塔 路郎選

兵庫縣 戸 倉 普  
 上衣なし行儀を崩せの謂でなし  
 上衣なしもう開襟を買ひたがり  
 尼 崎 水 谷 鮎  
 トモ釣りの岩に碎ける水をのみ  
 大 阪 橋 本 緑  
 六十でゲートルを巻く奉戴日  
 萬歳を一つ云はして子に別れ  
 森下山人氏令閨を悼む  
 淋しさは一人になつた涼み臺

山口縣 長 野 井 蛙  
 英靈へホーム打水行き届き  
 轉業を傘の屋號はまだ知らず  
 日の丸が扇にあつて子に奪られ  
 迷彩になつて南瓜は屋根へ逼ひ  
 堺 村 上 角 堂  
 モンペイの似合ふ娘のよい器量  
 死亡廣告腦溢血が眼に止り  
 大 阪 野 元 吐 空  
 蚊が二疋刺したスカート短かさよ  
 埼玉縣 伊 古 田 伊 太 古  
 難産と知るや知らずや子の育ち

訓練の休めに飲まず乳の張り  
 大空は子等に任せて畑を打ち  
 輕井澤木の頂を汽車は行き

布施 中 村 聖 司  
 落書も撃ちてし止まむの文字であり  
 さて出すとなるとでしやばり後に寄り  
 だが然し賞與の要らぬ顔でなし

大 阪 木 下 幽 王  
 營業用のキリギリスが鳴いてる長屋  
 謹告とは凡そ心にない文字  
 カボチャくいま貫々の上にあり

大 阪 福 田 安 夢  
 母と行く場末の映畫館の椅子かたし  
 またしてもお金を勘定するお方  
 吉野にて  
 看板は消えず 達筆 吉野 葛

下 關 鹽 谷 鯛 好 坊  
 火叩 梯子 捕物の形を見る  
 西 宮 加 川 泉 泡  
 だれ故の化粧にしても厚すぎる  
 特區線ちと老いほれの車掌居る  
 半島の街にのどかな手風琴  
 川雜西宮支部創立句會に路郎師を迎えて  
 巻脚絆まいて先生お越しなり

大 阪 府 井 上 登 志 緒  
 水槽に顔を映して女行き  
 ガラ／＼小學生は海へ行く

大 阪 府 西 野 一 望  
 日本の強さ此處にも工場街  
 弟 應 召  
 新たな歴史に今や馳せ参す

大 阪 岸 田 風 柳  
 負將棋團扇盛んに動くなり  
 悪口を云ふに女はうまがあひ

大 阪 井 關 惠 美 須  
 祭の灯膝へすつしり子の重み  
 一億皆泳次の世脊負ふ顔がより  
 大 阪 唐 津 朝 美  
 女車掌ドアの端で棒になり

大 阪 井 村 寒 浪  
 曾我廼家の説教を又聞いて来る  
 愛などゝ口には出さず尉と姥  
 押入れのベツトも作る子澤山  
 大 阪 府 川 村 好 郎  
 賣上げを一寸のぞいて出る主人  
 落ちぶれて屏風へ過去をふりかへり  
 水泳 場 漸く暮れた波の音  
 盃洗へお酒を捨てし日もありし

大 阪 恩 賀 紀 川  
 相當に引合ひまつせと鶏を飼ひ  
 大 阪 上 坂 茂  
 嫁き遅れ世間の態が斜に見え  
 手料理ですませ別れる友の肩  
 蚊帳の灯へ書棚は高く書痴あはれ  
 昭和十八年七月十日女の子を儲く

大 阪 丸 尾 潮 花  
 やはらかに抱くわがうへの晝の月  
 赤ん坊の夜泣きに夏の月うごく  
 たちまちに三人の父といふ自覺  
 われを繼ぐ子と寝る星の降るなかに

大 阪 丸 尾 潮 花  
 川蟹の爪赤々と陽が沈む  
 腹這ひのまゝで紹介状を読み

大 阪 丸 尾 潮 花  
 川蟹の爪赤々と陽が沈む  
 腹這ひのまゝで紹介状を読み

大 阪 丸 尾 潮 花  
 川蟹の爪赤々と陽が沈む  
 腹這ひのまゝで紹介状を読み

# 慰

き

# 問

つ

ご

# 袋

喜

ば

る

# を



## 大鐵百貨店

戦線の勇士へ

大阪中内翠芳

逸

祝ビルマ獨立

林

圍はれたマツチだ風よさからふな  
 そうめんを包んで客の後を追ひ  
 聖母出の秀才ですと言ふ眼鏡  
 ものゝ具の一つモンペ縫うて嫁く  
 ゴーゴリーイブセン兄の居ぬ書齋  
 繪日傘の慰問と見れば姉妹

大阪北川春巢

驟雨沛然修養會は灯をともし  
 風呂の沸く煙を見てる雨宿り

大阪尾崎方正

口紅へ蝶々が止るほど塗つて  
 お綺麗な齒です未開を聯想す  
 入れる物なけれど箆角張つて  
 持つ物を持たず態度に角が立ち

大阪中原銃人

ガスメーター一キロ減つた妻の聲  
 凹んだ硯にも似て三十三  
 うつかりと云へば切符が要るのなり  
 火華々々自爆がまた一機

ル・チ會談

合鍵をうちつゝ算盤弾いて居

山村へ歸省して  
 雲海の底を汽笛が鳴つて行き  
 谷一つ渡るに夕立暇をとり

大阪中内翠芳

病氣して  
 まだしねぬ僕に銃後の役がある  
 山廣し新割る音の人を訪ふ  
 決戦は勝ときまつた鯛が釣れ  
 馬鹿ぢやないけれどポカンとベス待ち  
 自給自足馬糞を拾ふ人がふえ  
 目禮をして傷兵の道を開け

一路夷

隨筆のモデルとなりし秋の雲  
 草刈の前と後ろできりぎりす  
 後家たてゝ浴衣の糊のきついこと  
 催促も手紙に書けばきつくなり

大牟田高田抱逸

迷信と思へど風の日を詣り  
 寝つかれぬ蚊帳でビルマの兵憶ひ

下田國弘半休

玉碎へ衣料切符を献上し

歸還せば隣家の友も征つて居り  
 やがて征く甥に訓へし歸還下士  
 電話では要點のみの歸還兵

大阪浪玲之介

デリーへ〜ボースの指は劍に似る  
 居宅安讓價格拾萬圓とある

西宮谷口綠葉

坊さんが電車に轢かれさうになり  
 蚊遣火を綺麗につけて女事務  
 落し物結局椅子の下にあり  
 鯛茶漬むかし〜の物語り

大阪武部香林

一寸の國土も敵に讓るまひ  
 廣域地方行政の發足

民情へ襖を明けて話しあひ  
 菜園の露に立つのも趣味のうち  
 浪曲に生き甲斐を知る共稼ぎ  
 強い氣になつて言ひ出す金のこと



# 初等川柳講座 (三)

麻生路郎

## 擬人法の句に就て

人間以外の生物や無生物を人に擬して、詩文の力を強化したり味を一層効果的にしたりする修辭を擬人法と稱して居ります。

川柳でも、この手法で作句したものを擬人法の句と呼んで居ります。例へば古句に

心太ひよろひよろひよろと  
かしこまり

と云ふのがあります。一見何んの奇もない寫生句のやうにうけとれますが、心憎いまでにシツカリと心太の性状、形態を掴んだ擬人法の句としての妙味を十二分に發揮して居ります。

しかも、中七、下五の表現で、無生物の心太が、人間扱ひにされ、滑稽味さへ附加されて面白い句となつて居りま

人法のホントの味を出したとは云へないでせう。

次に現代作家の擬人法の句を列擧し、それらの句に就て解説を試みることにいたします。

糠袋曰くお前はお妾か

(五葉) (郊村)

葱畑思ひく折れてゐる

(みさ子) (無鬼)

ねる部屋に來れば炬燵がまる

るうゐる (計加)

一飛びも蛙熟考してのこと

(同) (同)

物干のおしめの彼方雲走り

糸瓜もう水をとられる風と

知り (霞乃) (同)

廣告燈よほよほと文字

歩く (同) (同)

福壽草にしたがひ候かし

こ (同) (同)

蛙ふくれるな埋めてかへす

よ (石竹) (同)

水やれば茄子こちをむくて

かくと (同) (同)

鹿おもへらくなるほど刀掛

鹿 (路郎) (同)

まだありますが、これ位にいたして置きます。

「糠袋曰く」は八・九型の句であります。この句は顔ののぼしたり縮めたりして、少しでも美しく見せやうとみぎきたててゐるお妾の姿を髻髷とさせて居ります。そんなに

みがきたても、それ以上に綺麗にはならないよと糠袋をして云はしめた皮肉な句であ

ります。

「葱畑」の句は、葱の一本一本が、あちらへ向いたり、こちらへ向いたりして、折れてゐるのを人に擬して、思ひく折れてゐると詠んだのであります。この句は觀方の面白味を擬人法によつて生かしたのであります。

「ねる部屋に來れば」の句は炬燵を人間扱ひにして丸うゐると詠んだのであります。北國の旅などでよくぶつゝかる情景で、炬燵に親しみを感じた作者が、炬燵へよびかけた擬人法の句であります。

「一飛びも」の句は庭の隅などにジツトうづくまつてゐてなか／＼飛びそうで飛ばない蛙が、思ひ出したやうに飛んで、いつかそこらにゐなくなつてゐることがあります。それを作者は「熟考してのこと」と擬人法で句に纏めたのであります。

「物干」の句は雲を人間扱ひにした句であります。雲が走る筈はないのでありますが人の走るのに擬らへて、句意を強めたのであります。水が叫ぶとか、波が怒るとか、山が笑ふとか、臍が笑ふとかは皆、この雲が走ると同じ表現であります。ただ雲が走つた

だけでは面白くもなんともない句であります。この句は「おしめの彼方」といふ表現で「雲走り」を生かしたのであります。おしめに人間味が多分にもられてゐるところへ、そのおしめの「彼方」とおほぎように云つたところに更に興趣がにじみ出て居ります。

「糸瓜もう」の句は、あゝもう秋の風が吹いてゐるな、やがて水をとられるのだなアと糸瓜が云つてゐるのは作者がそう感じてゐるのを糸瓜に云はせてゐるのであります。同じ作者の「廣告燈」の句は、古句の「心太ひよろひよろひよろとかしこまり」と同巧異曲であります。よほよほよほの表現がいかに適切で、句を生かして居ります。

「福壽草」の句も福壽草を人間扱ひにして日本婦道を顯揚してゐる句であります。「蛙ふくれるな」の句は動物愛の句で、蛙が冬籠りしてゐるのを、ウツカリ掘り返へした作者が「まあ／＼そう怒るな、埋めてかへすよ」と蛙を人間扱ひにしてゐるのであります。「ふくれるな」は「怒るな」の意であります。

「水やれば」の句も、茄子がこちらを向きそうなことは



ないのでありますが、自分が手鹽にかけて育てたなすであるだけに「か〜と光つてこちらを向いたやうに感じ親愛の情を擬人法であらはしたの」であります。

「鹿おもへらく」の句は人間が鹿の角を刀掛にしてゐるのを見て、なるほど刀掛とはよい思ひつきだと感心してゐるところを詠んだ句で、鹿がそんなことを思ひそうな筈もないのでありますが、鹿を人間扱ひにしてこの句となつたのであります。

要するに、擬人法は人間以外の生物無生物を人間に使用する用語で描出して、句を生き〜とさせ、内容を一段と飛躍させるのでありますが、はじめから擬人法で句を作らふとしても佳吟が得られるものではないやうであります。

そして同じ擬人法と云ひましても、物のそれ自身が人のやうに働くのと、物へ對して人のやうに働きかけるのとが異なります。「雲走り」は前者であり、「蛙ふくれるな」は後者の例であります。

### 重語法の句

川柳作句の一手法として重語法があります。これはさし

迫つた感情をあらはす時や、ある事物を力強くあらはさうとしたり、念入りに述べやうとしたり、又は複雑にしようとしたりする時に、一駒の中に同じ語を重ねることを云ふのであります。

僅に十七音字しかない短詩型としては寧ろ一語でも節約しなければならぬのに、同じ語を重ねて挿入するのでありますから下手に用ひると、却つて句の力を減殺したり、無味乾燥な凡句にしてしまふ惧れがあるのであります。

重語は名詞を繰返へすこととあれば副詞や働詞や形容詞や代名詞などを繰返へすこととあります。例へば古句の

女湯へ起きた〜と抱いて  
と云ふ古句もあります。この起きた〜は動詞の重語の例であり、起きた〜と重ねたために亭主が子を抱い

て女湯へやつて来た光景が躍如として點描されて居ります。

泣く〜もよい方をとる形  
見分け

これは働詞の重語によつて、句意を強めて居ります。

持參金よく〜見れば鼻も  
あり

は低俗な句ではありますが副詞の「よく〜」はたしかによく利いて居ると思ひます。次に現代作家の重語の句を少しく列べて見ます。

誰に訊いても知らん〜と  
いふ缺

慰問品いち〜鼻に持つて  
ゆき

汗汗汗千人力の字がほやけ  
（美知夫）

軍事便てれこ〜になつて  
着き

赤い〜夕陽の中の竹簾  
（春三）

銃後銃後吞まずに迂て別れ  
たり

重語の句はいくらでもありますが、い〜句は尠ないやうであります。

「誰に訊いても」の句は知らん〜がよく利いてゐて

すぐれた穿ちの句となつて居ります。

「慰問品」の句も、「いち〜」が情景をハツキリさせて居ります。

「汗汗汗」の句は名詞の「汗」を重ねて、兵隊の汗のなみ〜ならぬ汗であることをよくあらはして居ります。「軍事便」の句は「てれこ〜」が句の内容を複雑にするのに効果的となつて居ります。

「赤い〜」の句は「赤い〜」で感じを強く出して居ります。

「銃後銃後」の句は銃後を強く意識するために繰返へしてゐるのであります。斯うして重語を適切に用ひ

ると句は一段と光りを増すことになりませんが、一步あやまれば、無用の語を挿入したことなりいかにも冗漫で内容のない句となつてしまふものであります。

### 疊み句に就て

古句の  
叱つても叱つても據薄着なり  
去られるのだに坊もいこ坊  
もいこ

のやうな句を私は疊み句と呼んで居ります。「叱つても」の句は五・五

### 新川柳評釋

定價〇・八〇

麻生路郎著  
本筋の川柳で一瞥選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治

### 詩人複眼

定價一・〇〇

川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高野聖純のペンネームで川柳雜誌に發表されたもの。

### 普天隨筆

（非賣品）

戸倉普天著・麻生路郎序  
川柳人の隨筆の面白さは又別である。この場合の面白さは滑稽さや意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東紡産業の専務。（實費三圓送料二十五錢で願つ）

### 戸田孤篷著・麻生路郎序

定價〇・九〇

柳二千六百年史  
定價〇・〇八  
著者一人の創作・録史川柳の史蹟をゆく。

街の難音（實切）大 空（實切）人の一代（實切）  
累卵の遊び（實切）

發行所 不 朽 洞

大阪住区區代万五二 振替大番三〇九二番

・七型の句で、上五と中五に於て同じ韻が繰り返へされて私の云ふ所謂疊み句をなしてゐるのであります。それは必ずしも上五、中五で繰り返へされなくても、「去られるのだに」の句のやうに中五と下五に於て繰り返へされても矢張り疊み句であり、

向ひ風嫁あはせてもあはせても

のやうに、中七中の五音字が下五で繰り返へされるやうな場合をも含んでゐるのであります。そして繰り返へされる音字は必ずしも五音字に限らず、それ以上の音字数であります。まして大體に於て、上と中中と下の韻が繰り返へされるとすれば、それを疊み句と呼んで、すこしも差支ないのであります。しかし

律義者まじりく〜と字が出来る(古句)

のやうに、同じ語が繰り返へされてはゐても、中七の韻の中で繰り返へされてゐるのは私の云ふ疊み句ではないのであります。これは「まじりく〜」の重語の句なのであります。疊み句との區別は次の例句によつてハツキリすることと思ひます。

ビールビール秋が来たとして秋が来たとして (路郎)

右の句の「ビールビール」は名詞の重語でありますからこの句は重語の句として取扱ふことも出来ないことはないものであります。中七、下七の「秋が来たとして秋が来たとして」について申しますならばこの句は疊み句として分類しなければならぬのであります。斯うして私は重語の句と疊み句とをハツキリと區分することにいたして居ります。所謂疊み句の特徴は重語よりも更に、句の内容を強調して著しく効果的にさせ、非常になだらかな調子の句となるのであります。しかし調子がよいのに、つひつりこまれて内容の方がからつぽになつてしまふ惧れが多分にあることに想到しなければならぬのであります。疊み句構成上にはさうした大きな陥穽があるのでありますから、なまじつかな疊み句を作るよりはむしろ繰り返へしに要するだけの音字数を他の目的に使用して一句を生かすのが作家の踏んでゆく當然の道ではないかと思ひます。

「去られるのだに」の句は婦人に格別苛酷であつた徳川

時代に離縁された女が愛児を残して出て行く時、無心なことも母の涙を知らず、どつか面白いところへでも行くものと思つて、坊も行くと思つて聞かないところを詠んだ一篇の哀史であります。「去られるのだに」と切つて「坊もいこ坊もいこ」と繰り返へして句意を一層強化した表現の妙味は疊み句でなければ斯う巧く詠めないのではなからうかと思はれるのであります。こゝへ又、現代作家の疊み句を持ち出して検討することにいたします。

逢ふて来たのに母寒からう寒からう (多喜友)

菜の花はあゝの屋根のはて屋根のはて (霞乃)

誰ははからず内の人内の人 (松郎)

泡をとほして獨逸では獨逸では (豆秋)

心配しましたてましたて (栗)

戀の畏あゝの眼だらうか眼だらうか (路郎)

「逢ふて来たのに」の句は、中七中の五音字と下五で繰り返へした疊み句であります。この繰り返へしによつて、母親の盲愛ぶりがハツキリと描寫されてゐるのであります。「菜の花は」の句は都會生活をしてゐる作者が、菜の花へ

のあこがれを疊み句によつてあらはしたものであります。「誰ははからず」の句は女性心理を忌憚なく表現するのに疊み句としての繰り返へしが周囲の人たちをタヂ〜とさせるほど餘りにもよく利いて居ると思ひます。「泡をとほして」の句は中五下五の繰り返へしで、何んぞと云へばあちらかぶれの意見を吐きたがる人たちを遺憾なく皮肉つてゐると思ひます。「泡を飛ばして」でいかにも感情の迫つてゐる上に、疊み句が更に拍車をかけて句意を強め、なるほど〜とうなづ

かせられるのであります。「心配しましたて」の句も繰り返へしによつて義理の仲らしい神経をつかつてゐるさまがよく描かれて居ります。「戀の畏」の句も、眼が持つ魅力にひきずりこまれてゆく戀ごろの、複雑な情緒を出すのに繰り返へしが役立つてゐることは云ふまでもないと思はれるのであります。疊み句の例は古句現代句を通じて、そう澤山はありません。たま〜あつても駄句である場合が多いのでありますから、今後の研究に俟つ外はありますまい。



片瀬醫學博士 述  
冊子呈上  
「安産のために」  
めいた



妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 監査  
推奨  
樹林醫學博士  
片瀬醫學博士

# ワダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



### 草一木一

私は 昨年の 川柳に「柳 祖在り し頃」といふ 話をし た。こ の事は 一夕話 にとど

めず単行本にして見たいと思つてゐるが、雑誌の編輯に當つてゐては執筆の時間が逆も得られない。それにしても、柳祖の幼年時代のことが何かによつて知りたいと思ふが、その片鱗すらうかがひ知ることが出来ないのは甚だ遺憾である。

日常生活の一端も知りたと思ふが、随想隨感式な覺書か、日記體の何かが發見されない限り、柳祖の心の奥へ深く立入ることは容易ではない。劍花坊は 川柳と號す其他に傳は無しとアツサリと片づけてゐるが其の著書に、僅かに一ページほど書いた傳記すら間違つてゐることを思ふと、すべてに大味だつた劍花坊はその方面

での人でなかつたと云へやう。

歴史的な研究には第一に根強さが必要である。そして偶然としか思はれぬ事柄との結びつきも必要である。川柳は全國的に多數の信者を持つてゐたこと、龍寶寺門前町の町名主をしてゐたことなどから類推しても、何ツ處から多少の材料が得られぬことはあるまい。

當時の町名主は區長に警察權を持たした位の格式だつたと云はれてゐた町各主の柄井川柳ではないか。そう簡単に諦めてしまふ譯にはいかぬ。これまでに研究らしい研究もせず、そんなことが判るものと云ふのでは道のためではないと思ふ。

川柳忌を前にして、特に篤學の士の出顯をのぞんでやまない。(路)

### 卓上燈

古本屋のあたま

▼これまでの古本屋の看板には「古本高價買入」としてあつたが、近ごろでは「古本をお賣り下さい」とある。なんでもないことだが、面白いと思ふ。  
▼何年までに刊行された本は十

三割までと公定値が決められると、ヨシ來たとばかりに、くだらない本まで一齋に値を上げる。年鑑物の古色蒼然としたのまで値が飛び上がる。  
▼一時、柳書が味噌も糞も一緒には買はないだけであつた。私たちがひそかに輕蔑した。  
▼古本屋はもつと勉強をしないと駄目だ。すべての本についてその本の價值を知ることだ。川柳が尊いのではない。名句が

有難いのだ。  
遙に乾盃を

私が日支事變以前に、唯一人の専門家として川柳に身を投じた時、ヤレ齋藤茂吉は専門家ではないと見當違ひの揚足取をやつてゐた某氏が、最近川柳へ轉業したそうだが、それはあまりにも時局を知らなさ過ぎる。しかも俳句の軒下を借りて川柳を賣るといふのだ。あきれて物が云へぬ。その點、神戸の紋太氏は自家營業を廢して造船所の事

務員になつたそうだ。まだ老齡と云ふ譯ではない。しつかりやり給へ。遙に乾盃を贈る。  
虫のよい話  
普天氏が隨筆を出した。賣るための本でないことは云ふまでもない。  
ところが四方八方から手が出た。そんなに讀みたければ、實費で頒けてやると云つたら、みんな手を引ツ込めた。一體何を考へてゐる人たちだらふと思ふと苦笑を禁じ得ない。(不死鳥)

## 同舟近詠

松山 前田 五 健

松山地方の水害

勤勞報國隊日々數千

握り飯雨のしぶきに背を向けて  
拜まれつ 拜みつ元の 田に返へり  
組長の鈍もよいものよく和み  
波の音 驛はもう寝た天の川  
瓜 揉みへ 五本の指の ありがたさ  
涼しさの中に女の 髮容ち  
灯を消せば百合はかほりとなつてくる  
金 淵 安川 久留美  
天折の雅號芒露といふ文字  
糸巻もいつかタンクの型なりし  
責任を残したやうな蟬の殻

蛸が淋しがらせる妻を伴れ  
許婚 歟を握つて 健康美

兵庫縣 長崎 柳 秀

生捕つたやうに風呂から子をかゝへ  
許婚 家具部でなにかさゝやけり  
唯逢へば 足りる男と純喫茶  
出雲 尼 綠之助  
少年兵 希望に燃えた禮をする  
女萬態 夏の車中のグロテスク  
大和 嶋 田 翠 峯  
口につく暑さがあつて米が出來  
子供にも その手があつた詰將棋  
星の名を覺えて 歩哨 瞳を移し  
耳飾り 黒さの肌でよく目立ち

源北 高峰 柳 兒



# 近作柳樽

## 路郎選

花にたゞその境遇にあまなじぬ 大阪 梨里  
 虫、ヒヨコ、天王寺さんのどか 同  
 洋傘で 行くお渡りの 喜劇めき 同  
 老母おいて 征く人さうと 拜みたり 同  
 喪服着て 一層あはれに見える 汗 同  
 子に希望<sup>ぞら</sup>を見なほす 世界地圖 下 關水月  
 お百性は 本當に 様様 様様 ね 同  
 非常時のすてゝならぬしつけ糸 同  
 決戦下 これでいゝよと 破れ靴 同  
 桐の花 踏んで日傭ひ 人夫くる 大阪 ひさみ  
 吊皮の 娘得意の ポーズでる 同  
 たゞ讀むるればこと足る 老夫婦 同  
 やせてゐることは 恥じなき 海水着 同  
 西下する 車窓 京阪神は 雨 大阪 寒草  
 夏祭たうもろこしの 値にあきれ 同  
 我かつて 戀せし乙女 前にあり 同  
 何かある毎に 世話すき金が 要り 同  
 休閑地 今度は 壕を 堀るところ 大阪 詩朗  
 此頃の 百圓札に しわが 出来 同  
 國難へ 散つた 勇士の 經木なり 同  
 大戦果 放送局も ちとあわて 同  
 地獄極樂風の 便りも 來ぬところ 和歌山 宏方  
 米英を おのれと ならむ 鬼瓦 同  
 雲の 峯 綿の見本の やうに 浮き 同  
 洋裁の 初歩にも んべを 教へられ 同  
 練成だ 黙つて 歩くと 叱られた 大阪 美奈子  
 ロンギーが 落つて 笑ひ合ひ 同

恙がなし 鍋ガチャ〜と 臺所 同  
 長雨に 女同志は 話好き 同  
 遅ればせながら 千人針を 縫ひ 大阪 夏子  
 雨だれへ 子の 夫婦ねると する 同  
 餓別の なか〜ら 土産物を買ひ 同  
 あの雲の 端なる 母の 身を案じ 大阪 秋子  
 女なり 女なりとは 思へども 同  
 慰めんためとは 歌も 詩も 悲し 同  
 石疊 今日 出社の 靴で 踏む 兵庫 縣花子  
 産報の 招待券で 誘はれる 同  
 日本は 強し 男は 物を言はねども 同  
 ブツツリと 途切も 便り 嫁ぎしか 滿洲 卜占  
 戦友が 毛布を かけてくれる 夜半 同  
 やあ君も 來たか と 戦友と 手を握る 同  
 詰將棋 誤植としらす 骨を 折り 神戸 小城子  
 基仇の 急死へ 勝つた 日を 悔ひる 同  
 借電話 睡を くれよともいへず 同  
 九尺二間 鶏も 住んでゐる 尼崎 利一  
 時々 蚊もさして よい 寝像なり 同  
 盆栽を 並べ 焚木が ない そうな 同  
 口論は 國を 憂ふる 眉を 上げ 宇和島 迷峰  
 受持の 兒童であつた 記事を 切り 同  
 驛長 助役 何事ならん 立並び 同  
 八時から 奈良丸がある 夜勤なり 大阪 研太  
 兄さんは 戦地に ゐます 夏祭 同  
 アメリカを 憎む 子の 手なばき び 同  
 蠅の 群 英米に 似た 執念さ 泰 風來子  
 アツツ 島玉碎の 悲報 同  
 あゝ一億の 瞳に 守られて 歸らぬ 同  
 悲報今 バナナの 皮を たゞ つけ 同

窓口で 生年月日 忘れたり 松江 祥月  
 サークスも 産業戦士に ごと云ふ 同  
 行水の 姿二國と 思はれず 同  
 姉妹が 逢へば 姑の 小姑の 大阪 花鶴子  
 病室は すまぬ 氣持の 妻が 臥し 同  
 御近所へ 養子娘で 氣が ねする 同  
 捨石に なれと 再縁 勧められ 兵庫 縣一丙  
 服ぬいで 夫としての 聲になり 同  
 青空の 朝だ米では 罷業です 兵庫 縣葛藤  
 ゲラ〜と 寄席中 繼が 笑ひます 同  
 死所を得 病身も 亦いと ほしき 松本 芳廣  
 やくだぬ 御民の 吾と 日を 拜み 同  
 一心に 切るネジ 祖國 護るネジ 兵庫 縣春童  
 珍客へ 逆立をする 男の子 同  
 女工専用列車 同  
 モンペイの花 嫁列車が お通りだ 吳 壽年  
 押花の 便りへ 覺悟も 早出來て 同  
 街路樹の 下 御無沙汰を 詫言 居る 尼崎 美世子  
 大掃除 父は 疊を 上げた だけ 同  
 應接間 税のかゝつて 居る 團扇 鳥取 縣悟志  
 夜宮から ヨイコ 献金 して 歸り 同  
 見送りは 母だけで よし 故郷の 驛 貝塚 庸司  
 素裸で ゐるの が うちの 坊や です 同  
 乗客へ 車掌は 強い もので あり 大阪 利美  
 泳げない 事を かくした 砂遊び 同  
 裁臺も 嬉しい 元祿 袖が 出来 大牟田 初舟  
 血には 血を 亞細亞の 民の 征く ところ 同  
 ゲートルの 足の 細さが 氣にかゝり 大牟田 平人  
 防火砂 少し 植木に 分けて やり 同  
 養子して 長谷・中山や 粉河寺 西宮 萬龜子  
 蟹の 眼に どの子も みる 惡さうな 同



看病の母もトマトを食ひならひ  
 戦ひは續く星ほどある島で  
 モンベキ女らしさの詫びが云へ  
 心配をするなが其後寄りつかず  
 京はよし鴨の流れに嘘もなく  
 色衝のいとも立派な防空具  
 草の根を分けて薬が届けられ  
 家計簿の妻にソロバン頼まれる  
 先客はねばつたらしい箕盆  
 長生因果と云ふがにくらしい  
 壽司にぎる手嬉しヤスリダコ

大阪府松緑  
 大阪府松緑

從兄應召

弱虫の異名見事に返上す  
 何時からか趣味も合つて隣組  
 捷つ國に二十四時間制の音  
 婦人部が揃うてお通夜と言ひ  
 ④のまゝで水引かけて呉れ  
 蚊帳の中探照燈も見て寝られ  
 強力が兎と龜を例に引き  
 香煙へ尼僧繪になる線を持ち  
 九管鳥ホンガリマセンカツツハ  
 豆腐屋の車なつかし配給日

奈良品平  
 京都府福平  
 愛媛鶏城  
 大阪佳春

ビルマ獨立

立ち上り見事米英けたぐりぬ  
 残業の隅に見つけた同じ趣味  
 七夕の笹が婦長の室に揺れ  
 階級を問はず風呂から口を利き  
 棹させば景色の動く舟なりし  
 おかしさは鹹ふる腰にくせ出て  
 スコップへ女なか／＼あなどれ

鳥取順子  
 鳥取順子  
 同  
 大阪邦太郎

又一つ島を覺へた大戦果  
 算盤にのらぬ力が捷ちつゞけ  
 より好み一寸鏡を見てごらん  
 半裸體みんな甲種になつた意氣  
 おにぎりで行は歌劇の娘もモンベ  
 一坪に桶をかついで氣分出し  
 鍛練の胸に名札も跳ね返る  
 ソロモンを知つて潮と子等泳  
 坪庭へ結局なすび植ゑたゞけ  
 白衣着て今日も元氣と書く便り  
 配給の地下足袋のくじ引をこね  
 一切の西風兄弟けんくわなり  
 老ひたかと腕の長さで本を讀む  
 華道免狀貰つて丁度廿一  
 専務の名を問は案内すると云ふ  
 尻理屈のあとでれくさく妻を  
 蟹とび蛙がないて稻をぞち  
 吊草に吊られて無事に奉仕隊  
 懐しい訛りの中に氣がゆるみ  
 剛魂に燃えて母校よさらば征く  
 小休止故里の話に短過ぎ  
 まだ浅い防空壕へたそがれる  
 電撃の首相が若い半ズボン  
 軍神の生家をつつむ夏の草  
 モンベいで揃へば女負けてゐず  
 水筒はからつぽ陣頭指揮の聲  
 温情に慣れて苦力がつけ上り  
 白い蚊帳大阪辯はよい寢息  
 召し得ぬ身もしつかり脚絆巻  
 十年になりますと腕を誇らざる  
 難行へ山容とみに改まり

貝塚孝一  
 京都岩川  
 布施龍夫  
 滿洲しげを  
 尼崎兼義  
 貝塚寒井  
 徳島庫夫  
 明石長次  
 貝塚堅一  
 滿洲二三男  
 奈良縣彌生  
 松江初恵  
 大阪白路  
 貝塚三九三  
 貝塚莊兒  
 尼崎光洋  
 大阪三葉  
 貝塚秀志  
 廣島雙馬  
 尼崎素行  
 滿洲錦風  
 大阪柳久  
 名古屋ひろし  
 尼崎治  
 大阪定ひち  
 徳島縣樂山  
 中支兼幸  
 貝塚正起  
 貝塚券太郎  
 廣島大陸  
 滿洲曉童

ふんばつて頑張る馬車遂にこけ  
 南面す敵機來ぬとは思へども  
 佩劍といとなごやかなドブ掃除  
 明石着てストロー吸としなつく  
 すれちがふ義足感謝の手を合せ  
 水たまりばかりよち／＼歩く  
 産月の肩をたゝいて征きました  
 月賞めて夜業の窓を閉るなり  
 お祖母さんも口説いた空の志願兵  
 病室がお國なまりで花が咲き  
 軍人の妻だ笑顔で記者と會ひ  
 知らぬ間に一年間も寝てしまひ  
 人の和を説いて課長も樂ならず  
 丸刈の心も堅し徴用工  
 嘘ついてしても先生の眼ごわい  
 ハイキング田植にお辭儀と通り

大阪醉童  
 朝鮮信坊  
 大阪石園  
 芦屋礎石  
 大阪鼓愁  
 大阪九茶  
 大阪眞星  
 大阪松風  
 大阪綾子  
 大阪六龍子  
 東京青衿子

大阪の地下鐵では出口で各自がキツプを函へ入れる  
 ことになつた。人的資源はこんなところにも  
 つてゐた。(不死鳥)

# 武玉川研究 (二三四)

梅 森 姪  
本 東 塵 山  
子 省 魚 二

## 五 編 (一六)

(258) 海を詠めて止る入唐

東魚 〓 渺々たる海原を見渡しては心細くもならふし、荒らひ波のさまをみては、おびえもしやう。

塵山 〓 海國男兒の名を辱むる小膽者だ。

省二 〓 前句の關係もあらうが、入唐を決心した者なれば、海を眺めて怖ろしくなり中止すると云ふが如き事はなかりさうで、寧ろ入唐を思つて居るものが、思ひ止まつたものと見做したい。

(259) 身うちが口で三度去らるゝ

東魚 〓 身體中口みたいいな、口達者なおしやべり者なのではないか。

塵山 〓 此の「去らるゝ」といふのは、離縁といふ意ではなくて、雇女が解雇されるとであらう。

省二 〓 「身うちが口」とは、親類からの口添えであるを云つたものかと思つてゐた。だから我儘なのではなきか。

(260) 六切の門へ這入て腰か抜

省二 〓 大名や武家の門限は六ツ切(六時限―午後六時)であつたから大急ぎ足早やで歸えりつき、やつと刻限に間にあひ、門で這入つて腰が抜ける程疲れる。

東魚 〓 そんなに造して遊びたいのが、待てるだけ一層笑止であり滑稽である。(遊びの場合とみなくともよいが、其方が句が面白い)。

塵山 〓 武士たる者が、斯る事に腰を抜かすとは、餘りに不甲斐無い。私は千代田の大奥の女中と解釋したい。

(261) 人形の中でのろまハ毒らしき

省二 〓 野呂間人形は、野呂松勘兵衛の考案なりと。形相頗る賤しく、顔も青黒く塗つてありしと云ふ。

東魚 〓 「毒らしき」は前説の如く青くぬつてある趣を云つたのであらう。

塵山 〓 野呂間人形は「大言海」にも「言泉」にも、操人形の種類とあるは誤謬で、人形遣が手摺の後に居

てつかふのである。狂言の立役をする人形を「あを」と稱して、其顔面が青黒いので、其外の人形は普通のものと同じである。「毒らしい」は毒々しいと云ふ意であらう。

省二 〓 「嬉遊笑覽」には、此句や七篇の『のろまつかひも蠟燭で喰』が引用されて居る。喜田川季莊は、予が妻幼年の頃は、兩國中村屋と云ふ茶屋にて毎時行之を見る。淨瑠璃は江戸半太夫節にて辭も一風あり、實に頑愚の情態をなす。幼年と云ふは文政の半なるべし、其後廢て不見之と。「甲子夜話」には其品目が擧げてある。

(262) あやまる客へ立て居て酌

省二 〓 もう十分遠慮なく頂戴したと、客は言譯をし辭退するのに、まあ〜と聞き入れず、頻りにすゝめて酌をする。

東魚 〓 悪く酌人をからかつたのであらう。立て行かうとするのへ、まあ〜悪るかつた、さう怒るな、などと云ふ客へ、流石にさう手ひどくも出來ず、立ち身の儘で酌をする。

塵山 〓 「あやまる」は辭退するの意らしい。

(263) 安物買の主従か出る

省二 〓 この主従は大門行なのではないか？

東魚 〓 格安の物を買はふと云ふ、

## 北支征破回顧 斷片 (其四)

加川 泉 泡

「花かるた傘のあり敵陣地」より唯一の糧秣と頼んだ糞もすつかり落ちて終つた。おそなりの茄子、胡瓜をちぎつてそのまゝかじつたり、岩鹽で揉みくちやにして空腹を満たすより他にすべがない。我々の攻撃する前面には敵ながら立派な陣地を構築して發砲して來ますがこの支那兵をボンボンあしらひながら目前に迫る新樂城に向つて進撃んでゆく。果しない平原や山岳地帯に新しい土を掘りあげて蜿蜒幾里かの立派な陣地//こんな立派な陣地でよう頭張らないとは、占領毎に不思議に思ふ位である。堂々たる陣地、恐らく一ヶ月二ヶ月の日時をかけて造り上げた陣地//それを一度び皇軍の攻撃にあふと瞬間おしげもなく捨て、雲を霞とにげて終ふ。而も壕内に花かるたや雨具一式の戦利品を頂戴することしばしば、と云つては、いやはやどらも當方恐縮する。三十六計にげるに如かず、この諺を忠實に守つて下さる點敬服する場合もあり、いつそんな陣地を造らずに居れば良いのにと要らない心配までしてみる。目的貫遂の爲には如何なることがあるう共頭張り通せ、爾後落伍者ある場合は戦死と看做す、嚴然たる部隊長の訓示ありて幾日か流れた。唯一人として落伍者もなく、皇軍傳統の誇りとする任務盡行の爲には死して尙已まずの意氣益々溢れての攻撃はあらゆるものを征服して限りなき銃後の赤誠に應へて頭張り通してゆ

ちと吝い人物ではないか。召使だけにまかせると、免角高い物を値切りもせず買ふから、主人自ら供をつれて出掛けるのであらう。

塵山 主従が物を買ひに外出するのでなく、自宅の門口に出て、商人と談判するのだと思ふ。

(264) 留守くゝと立派に言て大つゝ

省二 留守だと断つて居るのに、奥からは大鼓の甲高い音がもれてくる。一借金取に留守をつかはせて坐敷で賭碁をして居る者もあるが、太鼓では直に化の皮がはける。『大三十日亭主二階で琴をひき』は孔明を真似た策なるも、對比して面白し。

東魚 矢張り歳末風景であらう。

塵山 化の皮を張つた太鼓か。呵々。

(265) 手箱金妻ハ喧嘩のふまへ物

省二 手箱金があるので、細君喧嘩の鼻息が荒いのか。手箱金が無くなつたのを証據に夫婦喧嘩が始まつたのか。再考中。前説の方が素直ではある。

東魚 「妻は」とある句調などから、第一の説に賛成。

塵山 自分も第一の説に左袒す。

(266) 懸人なれす二階から落

省二 この掛人は未だ家になれず従て気分も落ちつかず、そはくして居るので、二階梯子から足をすべらす。

東魚 笑止千萬でもあり、哀れさもある。懸人は「かゝりど」と讀み下してよろしからむか。

塵山 落語などでも懸人の部屋は二階のやうである。

省二 「かゝりど」と讀む。一序に一言。大正から昭和の初にかけての句に、「二階借」をよむだものが多い。川柳家には二階借をして居る人が、そんなに多いのかと思つたりした事がある。

(267) 干からひにけり伊藤源介

省二 源佐(仁齋先生)にあらざるか。尙ほ源介を調査致してみむ。

東魚 お説の如く伊藤源佐(一本に源祐とあるを見たり)、即ち仁齋の事であらう。古學先生と私に諡したとあるから、「干からひにけり」の諧謔も當はまると思はれる。

塵山 「佐」は「すけ」と訓むので「介」は充字であり、「干からひにけり」は老儒といふ意であらう。

省二 仁齋は七十九歳にて死、先哲像傳をみると風采堂々たるもの、生涯處士にて終ると。字源祐ともあれど、北村可昌撰墓碑銘に「字は源佐」。

(268) かてんせぬ文を押込ほんのくほ

省二 頸窩に手をやつてどうも合點せぬ手紙だと、その場をつぐるふのではなきか。「かてんせぬ文」は臭いのである。

東魚 文の仲立ちにたつた男が、そんなものは受取れぬと云ふ女の、うつむいた襟へ、文を押込んで付ける場合であらう。

塵山 東魚君説に賛成する。

(269) 脇指を面白くぬく大神樂

省二 大神樂たばさんだのが上手なり。抜いて演ずる。脇指がおどける。

東魚 興最高潮に達するあたりで脇指などをぬくの、面白くぬく」と表現したのであらう。

塵山 大神樂の曲鞠に、劔の双渡りといふのが有つたと記憶する。

(270) 隣歩行をさせぬ榮箸

省二 隣あるき?。(一)一つの箸で、あれもこれもと探るのは不作法だといふのか。(二)隣の人の皿へ探つてやる不作法をせぬといふのか。(一)らしく思ふが。

東魚 近所の食物屋などへ、出歩かぬほど家の料理、手際がよいのではないか。

塵山 一つの茶箸にて、種々の食物を扱まぬといふ意歟。

く。一日の行程中には必ず腰の邊まである川を少く共四ツ五ツは渡河しなければいけない。勿論靴も靴下も脱いで渡ると云つた悠長なことは情況上ゆるされぬ。全員びしょ濡れになつて肩に喰ひ入る背誼の重みに耐え、急流に足をさらはれないやうにしてぐんぐん進撃してゆくのであるが靴の中の水がガブガブする毎に靴下が全部靴の先端に固まつて指先で團子となりコロコロする。指先が痛いので自然にぢぢめて歩くのでどうしても豆がたくさん出来る。この豆の痛さを堪えしので引きずり、引きずり歩いて居ると、もう自分の足か他人のかのケジメがつかないやうになる。こうなるともう占めたもので一日や二日位は平氣で頑張れる。然し一寸休憩すると一丁間はコロコロとどび上る程痛い。大休止なんかあると昨日の川を越したままの濡れた砂や泥だらけのしかも團子になつた靴下をひつぱりだして手速く伸す。そして熱し切つた足を冷すのであるが白く膨れ上つた豆だらけの足をグツと引よせてながめて居ると人間の足の弱さにつづく愛想が盡きる。頼む、頼むぞと足に言ひ聞かせる手がかすかにふるへて来る。北支の十月中旬と言へば夜分は相當に冷々するがズブ濡れの腰から下が夜行軍に露營にズキンズキンと痛む。おのれ蔭介石軍位に、負けるものか。負けてたまるかと心に叫んで、一歩一歩大地を踏みしめる軍靴の音が果しない平原を山岳を縫つて行くのである。



# 評句 作品 一一三

路郎・亞鈍・銃人  
紫香・香林・幽王

本誌の句評が、作家指針として大いに期待されてゐるので、初秋の「夜路郎・亞鈍・紫香・香林・幽王の諸氏に不朽洞の卓を圍んで貰ふ。姐上のほした作品は總べて前號の「近作柳樽」欄の中から選んでいただいた。

(銃人)

野の毒婦斬斑猫曼珠沙  
(赫堂)

幽王最近の近作柳樽の句は説明的な句が多い様に思はれますが、其の中で此の句は面白い見方をしてゐる様に思ひます。然し一應はうなづけますが一語一語分解して眺めると非常に説明しにくいものとなります。

路郎流石に赫堂君は松山の古强者だけに特異なものを擱んでゐると思ふ。幽王君が今解剖とか説明がしにくいと

ばならぬのである。表現法としては「野の毒婦」として夫々特異な名詞を幾つか羅列して特異な句ひを出してゐるところに此の句の面白さがある。

紫香君読んでわかるがさてと云はれると一寸説明しにくいですな。

路郎と同じ作者の句で

釣竿は話せば語る人なり

は讀んだらすぐわかる句だが提出句の如きは感覺の少しく鋭い人でなければ、直感し得ない。

講評へバケツをおいてかしこまり  
(庸司)

紫香君句そのものは或は平凡かも知れませんが、此の句から受ける眞面目さ、さう云つたものが私は好きです。今までは訓練としての防空演習だと云つた風に見られ勝ちでしたが此の句では隣組の一致した気分が良く現れてゐる。「バケツをおいて」と云ふところで婦人部隊の眞剣な氣持が出てゐると思ひます。

香林君表現が少し平凡の様にも思はれますが戦時下に對する民衆の決心が良く出でゐると思ひます。

(この時、亞鈍氏出席)

銃人君下五の「かしこまり」は川柳常套語として良く使はれて居りますが、此の句はやゝ平凡な表現法のやうに見られ易い常套語を比較的巧く生かしてゐると思ひます。

香林君銃人さんと同感ですが此の「かしこまり」の中には炎天下懸命な訓練をやつていよゝゝ其の講評の前に自分を投げ出してゐる眞剣な態度が良く出てゐますネ。

風雲は急なり地球音を立て

(ひさみ)

銃人君此の句は表現的にはまだ若いところが有るやうに思はれます。「地球音を立て」は少し無理な表現だと思ふのですが然し今の戦時下の川柳人としては、これ位強い語を使つた句もあつていいのではないのでせうか。

紫香君實際に於て地球が音を立てたのでは勿論あるまい。作者の闘争意識から來る押さへ切れない氣持が此の表現となつたものであらう。

路郎君勿論地球が音を立てたのではないが、「これは擬人法の修辭で句の力を強化したのである。そして「風雲は急なり」に呼應したのであ

る。これだけでは只戦争をしてゐると云ふおほまかな表現になつてゐるだけで、もう少し具體的な焦點がないと切角力強い表現をしても全體がぼやけて良い句にはなりにくいと思ふ。

亞鈍君先生のあとから意見を出して恐縮だが又自分が句を直すも云ふ程の柄でもないんだけど僕が此の句に先程か

化體症に  
アルバジル錠  
20錠 50錠 100錠

ら引つかゞつてゐる事があるのです。それは「風雲は急なり」と云ふところを「風雲急なり地球が音を立て」としてほしい。作者は五・七・五型としての構成に意をそゝいだ



ところが有る。そこに、銃人君が句の表現に無理があると云つたやうに、成程句調としては形式がととのつたけれど表現に無理が出てきた。「風雲急なり」と云ひ切り、「地球が音をたて」と二つに切つて八・九型にすればよからう。先生何うですか。

路郎「風雲は急なり」と「風雲急なり」との差は作者の呼吸の差であるが、「風雲急なり」のやうな大體漢語から出たものはやはり「風雲急なり」と強い型式の方が感じをはずきりさせる點、亞鈍君の訂正句の方が良いと思ふ。然しいづれにしてもこれだけでは、やゝ抽象的な感じしかうけとれないので、句としての味が充分に出ないと思ふ。

路郎「これは話が別だが、近ごろ前書の句が非常に多い。作家としては、作句した時の邊境を明らかにして置きたいのは無理のない話で、必ずしも前書をつけることが、いけないと云ふのではないが、前書がなければ、句の感じや句境が明瞭にうけとれないと云ふのでは、句の獨立性が疑はれる譯である。前書の助けを借りないで、句は句として

すぐれたものにされたいものである。假りに出征する人に贈る場合の句であるなら、その人に捧げる短冊に前書をつければよいのである。何れ前書については初等川柳講座の方で詳しく解くつもりであるが、免に角、前書はなるべく削つて欲しい。削つて句意がハッキリしない場合には作品の方にむしろ欠點があるのではないかと吟味して見る必要があらうと思ふ。

銃人「それではもう豫定の時間がまゐりましたので、今夜はこれ位にいたして置きませう。どうも有難うございました。」  
(幽王筆記)

### 新會員を募る

松坂藝能講習所 川柳講座  
(松坂俱樂部改稱)

▲戦時生活下の常識として川柳を知りたい人 ▲人間陶冶の詩として川柳を創作したい人 ▲従来作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々 ▲松坂屋百貨店(日本橋筋三)の七階にある松坂藝能講習所の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後二時から、新形式によつて開講(後句・添削批評講義等)會費一ヶ月一圓入會希望者は七階の講習所受付へ申込みたい(川柳講座幹事)



## 募 集 句 一 路 集

### 工場街 鮎 美選

通勤の歩調揃ふた工場街  
工場街凱歌のような音で明け  
共稼ぎ出来てうれしい工場街  
父と子とおなじ工場街へゆく  
工場街撃ちてしまひ顔ばかり  
増産へ火の玉となる工場街  
工場街南の風に蘇へり  
工場街こゝでもトマト伸びてゐる  
工場街奉仕の服が揃ふ朝  
報國隊へやさしい工場街の人  
金鶏もう賣切れました工場街  
工場街の煙を切つて行く高架  
工場街油の顔で飯を食ひ  
工場街勝たねばならぬ黒煙  
工場街少し汚れてシャツ乾き  
工場街すぐ戦場へつゞく音  
工場街お稻荷さんの赤い屋根  
工場街静かに暮れる節電日  
工場街今満月の下に照り  
(佳)日向葵を咲かせ開ふ工場街  
(佳)たくましい肩が若ふ工場街  
(佳)工場街煙の下でヒマが伸び  
(佳)工場街昔は潮の来たところ  
(佳)増産をアツツに誓ふ工場街  
(佳)工場街煙の上は日本晴  
(佳)産報旗戸毎に震へ君還る  
(人)工場街首相來る日もあわてな  
(人)起重機の日丸目立つ工場街  
(人)敵を撃つ響の中の工場街  
(地)工場街義足の人が追抜かれ

祥三 勢三 惠美 醉童 可學 琴盛 秋子 風柳 天風 十四之 一平 乙山 樂山 カズエ 好郎 研太 彌生 春童 葉光 宕川 石園 初舟 茂平 福古 伊古 武士 正一 秀志 鶏城

### 安 産 久米雄選

(地)工場街戦士(ピール)どつと  
(天)工場街沖に船團並んでる  
(軸)爆撃は模擬工場街の陽はたかし  
女の子もよし安産の夜が更ける  
入城へ安産の文追つて来る  
安産へ屏風の中の妻若し  
安産へ日本男子が一人殖え  
安産が續く東亞の勝いくさ  
幾山河越えて安産通知来る  
安産の電話夜業の中へ鳴り  
安産のトタンに兵とするつもり  
安産の二男一女で止つてゐ  
安産へ拍子抜けした隣組  
安産と知らせば行くと言ふ返事  
安産を頼む特配券が来る  
安産の乗或日の主婦の友  
安産を工場へ知らず借電話  
安産と知れる産婆の笑ひ聲  
安産の朝朗かに晴れてゐた  
安産へ縁の障子を開けに立ち  
安産を門衛さんが知らして來  
安産の母へ戦果もそつと告げ  
安産の電話待遠しい退社  
安産ともう決めてゐる三人目  
安産に決つてゐますと子澤山  
安産の子へ保健婦の日記帳  
安産の護符を母から届けられ  
安産の本と夜汽車で里歸り  
安産のお札姑と受けにゆき  
安産にラヂオまた〜勝つた聲  
(佳)安産へ新調のものなくですみ  
(佳)お守りへ母安産を疑はず  
(佳)安産へ鯉が大きく跳ねかへり  
(佳)安産の双児へ夫あわてたり  
(佳)安産は國へ捧げる男の子  
(軸)安産の軒端へ雀鳴きに來る

龍夫 福平 九坡 堅一 彌生 祥月 福子 秋子 カズエ 伊古 葛藤 武士 醉童 天風 十四之 葉光 惠美 勢三 風柳 朝義 兼美 昌男 邦太郎 龍夫 樂山 翠柳 正起 一歩 鶏城 慶一 照二 研太 春童 可學 久米雄

# 柳界展望

係・統人

▼本社主催「上衣なし」句會は八月七日午後六時半御津八幡宮にて開催▼川・雜布施支部句會は廿一日六時半城東商業學校にて▼松坂藝能講習所川柳講座は一日、十五日午後二時▼有恒俱樂部川柳講座は十三日・廿七日午後四時▼大阪選信病院川柳會は十六日午後五時▼川・雜花園支部は廿一日午後六時から木阿彌居に於て開催▼大阪警察病院川柳會は廿日午後五時▼柳生會は卅一日午後六時▼阪大川柳會は廿五日午後五時開催

## 消息

▼德光秋人氏(安東)は商用で來阪、八月一日の松坂藝能講習所へ來所、臨時會員として麻生川柳講座の講習をうけられた▼麻生アト君は一日の休暇を歸省主幹宅にて歡談同夜歸吳された▼岩崎松代氏(不朽洞會員)三日午後、はじめて不朽洞を訪ねられた▼今西鼓愁氏(堺)岡陸軍病院に入院中の氏は月末退院、數日後廣島へ初旅をされた▼戸倉普天氏(不朽洞會委員長)の「普天隨筆」(非賣品)の見本が二日に出來たすこぶる簡素な装幀であるが、四百ページに近い堂々たる隨筆である▼佐々木三福氏は要務の關係上東京に半月大阪に半月の生活をされて居る由▼西野一望氏(不朽洞會員)は永い病床からこの程解放せられた▼麻生路郎主幹は九日の退

川協のページ

社後、奈那さんを伴ひ、和歌山市粟の鶴野氏方へ十二泊、滞在中も社務を見られ、十一日加太淡島神社へ皇軍長久を祈願、其後の不朽洞會に於ける編輯部・句會部の部會にのぞむため歸洞された▼高峯柳兒氏(北淡)からの通信の二節に空の要塞氏の洗禮も受け候が例の圖體が大きい丈けのことで鋭敏な友軍機の前には逃げ足の早いことだけに候云々▼米澤曉明氏(大洲)は先般の水禍に「いろいろの意味でよい體験と句を得られた」由▼佐伯鶴城氏も輕微の浸水を受けられたが愛鷄二百羽に異状なしとの事尙同氏は近く離松される管▼西川青美氏(不朽洞會員)は四日夏の富士五湖を巡り輕井澤へ▼朝鮮川柳會では姪子京二氏を迎へて歡迎會を四日京城にて開催▼港川柳會とあざみ婦人句會第二部合同句會を八日利美居にて開催された▼路郎主幹は十五日神戸トキワ合板株式會社の慰安會の招聘に應ぜられ川柳講演により産業戰士の方々を慰問された▼水谷竹莊氏(不朽洞會員)は放先清水市より「特急車カナン」帽を恐がらせの句を寄せられた▼佐野ト占氏(滿洲)から街の書店へ「陣中川柳」を入手したとの知らせがあつた。主幹が兵隊さんの慰問の爲に編纂されたものだけにト占氏のこの頼りは大いに主幹をよろこばした。

▼岩崎輝古氏(西宮)は去月浦戸丸にて遭難他界された。不慮の御災難を悼む▼井村寒浪氏(不朽洞會員)令息文夫君は七日急逝された。哀悼▼入澤笑鬼氏(松江)は十二日に逝去された由。謹んで悼む

## 轉居

▼德永林業子氏は朝鮮全羅南道順天邑順天公立農業學校へ▼長松宗一氏は山東省濟南銅元局前街九號濟南造紙廠へ▼平川久枝氏は神戸市兵庫區算所町七一清風莊へ▼佐藤宏川氏は京都市下京區上丹波口櫛笥東入へ▼大林恒生氏は下關管理部總務課へ▼橋本路風氏は阿部野區北島東二丁目二八へ▼岡崎祥月氏は松江市外中原町八大野方へ▼加藤親雄氏は山口縣德山市一番町へ▼兄玉順三氏は大阪市住吉區帝塚山東二丁目帝塚山病院へ▼八田一鉢氏は大阪市西區京町堀上通一ノ二五・一新社内へ

## 訂正

▼前月號二〇頁一段三行目の句は「普天」と訂正

## ★社の回覽板

★「普天隨筆」のこと——不朽洞會の委員長である戸倉普天氏が隨筆を出された。所謂賣文の徒の、書くべくよぎなくされて書いたものと違つて、書かねばならぬと書いて書いたものに書中の一文一文がそれだけの趣きをもつてゐて知らず／＼讀してしまふだけの味をもつてゐる。非賣品ではあるが、特に希望の向きへは著者の好意により實費で頒つ方法を講じたので、一讀をお薦めする。(不朽洞の廣告参照)

★國策への協力と質的向上への二方面から、選句を一段と強化することをなつたので、一層の精進を期待する。



## 廻轉椅子

★戰爭の前には科學人も文學人もない。みんな東になつて戦ふより手はない。本誌も紙の彈丸となつて活躍を續けてゐる。

★拙稿「銃後の匂ひ」は前號限りで打切ることにした。内地も戦線に續く戰場であつて、もう銃後といふ言葉がふさはしくなくなつたからである。と云つてビュー／＼彈が飛んで來てゐると云ふ譯ではない。昨年の四月十八日以來一機の敵も襲來はしないのであるが、いつなんどき空襲があつても、あつてないやうに各自境まで掘つて防空にそなへてゐるありさまだ。産業戰士が夜を日についての物凄く放闊ぶりは戰場にも等しい空気をかもし出してゐるからである。

★希望の「初等川柳講座」の續稿を本號へ發表することが出來た。少しく餘分にスペースを與へられたので、「擬人法に就て」と「重語法の句」と「疊み句に就て」の三つを一括して發表した。

★西田紳樂氏の「雜草と江口と休閑地」は「紳木徒然」の續稿として送られたものであるが、

化體症  
中耳炎  
扁桃腺炎  
敗血症

ルツベルグ錠

いつもの原稿と少しく趣きを異にし、時局色の筆が加味されてゐるので雜文欄原稿の扱ひにした。執筆者と讀者の諒承を得たい。

★久しぶりに句評を試みた。「作品二三」がそれである。誌面が充分でないので、澤山な句を姐上にのぼす譯にはいかなかつたがこれも本誌の特徴の一つであつて見れば、今後も誌面のゆるすかぎりは續けたいと思つてゐる。

★本社では例によつて九月に川柳忌を營み、故人の偉業を追慕すると共に將來への發展を祈願することにしてゐる。

(路郎生)

いのちある句を創れ



投稿清規  
用紙は原稿用紙、文字を正確  
用紙は原稿用紙、文字を正確  
毎月廿五日投稿元は本社宛

本社 上衣なし句會

八月七日 於御津八幡宮

虚飾を排し、簡素化、能率化への今夏の決戦姿「上衣なし」は、また吾々柳人が肩書を捨て、一夕の川柳句會へ臨む姿でもある。七日夕、御津八幡宮に開かれた本社の上衣なし句會は正に時宜を得たものと云へようか。殆ど全部と云つてもよい。何れも開襟シャツの白一色、場内は一段と明るく、また和やかな空気に満ちて席題の句作が續けられた。當夜は朝鮮京城から歸省された小川恒明氏(不朽洞會員)、幾年も顔を見せられなかつた道田葉平氏が久振に出席された。席題の披讀が終つて路郎主幹の「上衣なし漫談」は實現間のこととして話材に乏しからうと些か懸念もされたが、流石に主幹、それからそれへと長講を笑聲裡に續けられて暫し一同の暑熱を忘れさせられた。

「然し、公式の會合や儀式の場合の上衣なしは、まだそくはない感がある」と結んで、引續き兼題「上衣なし」を披讀、和やかに十時句會の幕を閉じた(統人記)

出席者(順序不同)

- 路郎、幽王、香林、佳春、潮花、惠美須、石園、清月、葛藤、千枝丸、孤蓬、綠葉、武良里、茂、朝美、眞星、照二、正也、光男、鮎美、福平、妄夢、神風、綠雨、

美奈子、不二、風柳、よしを、恒明、好郎、朝太郎、晴孝、三司、泉泡、光洋、三葉、葉平、春童、綠風、統人、てつや、醉童、紫香、聖司、一勢、奈那、梨里、喜弘、晶平

席題「第六感」

第六感 かくした菓子の 在り所  
母親の胸フトくらき 第六感  
自分がかゝつたら、ベルが鳴り  
第六感今日社長が来る日なり

席題「街路樹」

街路樹も今寝しつまる 天の川  
街路樹を鏡に隣なす作る  
街路樹の蟬の居所見つけかね  
街路樹(仔虎)アクビをしてゐる  
街路樹の下を燕がぐぐりぬけ  
街路樹の下で日傘を開く音  
街路樹へ突當りさうにバス止り  
街路樹の蔭が届いた 信號所  
街路樹をけりく 電車待ちある  
街路樹の蔭に寝息の 乳母車  
驛降りてからのポプラへ歌を出  
街路樹の掃除がめだつ 一年生  
街路樹も 植木屋ついであて  
街路樹の下に小さな茄子トマト  
街路樹に少し風ある 靴磨  
賣切あつと街路樹は見上げられ  
街路樹の一寸とぎれた家とき  
街路樹はちと電線が邪魔になり  
街路樹の影一ぱいにバスを待ち  
街路樹の色がきれいな 俄雨  
八月の 暑さ街路樹汚れてる  
ビルの窓街路樹だけの青さなり  
街路樹の根もとに 土があり

席題「日焦け」  
初年兵 日焦けの顔で 戻つて来  
日やけた事も自慢の 報國隊  
日焦して 原住民と並んでる

- 緑雨、選、三司、夢、清月

日やけた顔、奉仕のお茶をだし  
日やけた 顔に涙の 日章旗  
査閲官日焦けの腕をグツとあげ  
日焦した顔に決意のありありと  
南方の日やけは マライ語もまじり  
たのもしさ 眞黒になつた子が並  
胸を病む人と思へず日やけする  
高々と日やけの腕に土 上げ  
日焦した顔も頼母し 歸郷兵  
日焦した娘 一家を支へてゐ

兼題「上衣なし」

上衣なし日本は 辛抱強かつた  
上衣なし 扇子 一本 落しざし  
上衣なし 未缺の書類 影もなし  
門衛は 上衣なしでも 儼とある  
上衣なし 去年盗られたまゝですみ  
御焼香 代理上衣 なしのまゝ  
上衣なしだがネクタイを締めて来  
行軍へ 濟まなく通る 上衣なし  
はじめの 上衣はいらぬ仕事持ち  
社長室 秘書も課長も 上衣なし  
上衣なし ビールの腹 見てとられ  
英靈へすこしあわてた 上衣なし  
呑みやけの胸 ちらつく 上衣なし  
腕章を 上衣に付けたまゝ 忘れ  
上衣なし 風を背中に背負つてる  
上衣なし 靴のバンドに 趣味をみせ  
上衣なし 母のモンペに 送られて  
ワイシャツを 氣に 上衣なし  
もう一つポケット 欲し 上衣なし  
上衣なし 重役室の窓の ヒマ  
打水を 上げ 通る 上衣なし  
上衣なし 口紅 暑いものに見る

川梅田支部句會(大阪)  
七月二十一日 鮎美報  
軍事便やはり昔の右下り 一也

軍事便 兄の強さがうかんで来  
母親は まづ神棚へ 軍事便  
軍事便 もうマライ語が交へられ  
軍事便 遺品となつて 讀み直し  
安産の妻へ 元氣な 軍事便  
軍事便 ひらく 落ちた子の 寫眞  
モンペ着て 茶漬で 濟す 訓練日  
茄子の色きれいな音になる 茶漬  
全快の 母の給仕の 膳につき  
全快の うれしき 一步前へ出る  
全快の 窓からのぞく 子の笑顔  
全快を 奇蹟のように 皆んな云ひ

川廣島支部句會(廣島)

何が秘密なのか子供等の耳打ち  
残置燈の上は管制された 闇  
突進の道は九段に開けたり  
突進のラツパに消える故郷の夢  
こつそりと覗いてはつての 悪い顔  
かくし事なく夫婦ぎりの二十年  
二十年 かくし貯金が役に立ち  
突進の 眞つ先に立つ 日本刀  
残置燈までを 娘はちと急ぎ  
擴聲器 五分遅れた 汽車が着き  
引締めた口頼もしい 歸郷兵  
勝つための 品賣る店の 残置燈  
突進に 虎も大蛇も 面喰ひ  
残置燈やもりが 這うて 雨となり  
臨時計 残置燈まで 持つて 行き  
蚊柱をはつきり見せて 残置燈  
乗換の 鞆が重い 擴聲器  
突進の 一路は神についで いる  
擴聲器 首相の 咳も 入れて 来る

川下關支部句會(下關)  
半休報  
海行かばまでは父へすつと出る 鯛好坊

南海の魚雷を抜けた後来る末の子の寝冷気付かふ軍事便宿題の昆虫父も特出され晩酌へ宿題の子は背を向け宿題の子達へラヂオ細くする宿題の子供と共に縫ひ更ける宿題を寝さず知事は惜しまれるブラットへ慌て、降る。發車ベルあの人の母かホームへまだ一人列車今 ホームへはいの擴聲機ホーム今無言で降りる父を待ちホームを振るハンカチは見え迄支關の構繪給者と見ええ支關の下駄子澤山だと思ひ来る管の子へ冷蔵庫の刺身刺身きつちり青磁皿の美しい

三池染料支部句會 (大牟田)

七月廿四日

於 早鐘講堂 蝶人報

萬歳は真心こめた贈りもの清貧の中に真心信じ合ひ鍊成へモンベ部隊の強さ知る鍊成の山はまだく低く過ぎる鍊成のその苦しみが役に立ち上役の今日の無口が氣にかゝりお喋舌に無口ますく黙りこみ殺される朝まで鶏は時を告げ變人へ其座の空氣白け切り敬遠をする變人へ見込まれる變人の何か自信のある仕事七轉八倒そも變人と見捨てられ

川櫻島支部句會 (大阪)

利美報

仇討つ氣荒鷲になる男の子男一人襷給物をたのんで來釘もつて男の腕にたよつて

蛙鳴く村は細かい雨になり休日雨へ立つたり坐つたり降りだした雨へ蛇の目かして吳る俄雨客に干物おしへられテル坊主雨の吹きこむ窓終點へ来て唄も出る車掌さん茶摘唄秋は嫁いでゆく禪客足がふつととたへた宵の雨

川堺支部句會 (堺)

七月二十六日

於 波夢造居 角堂報

供木に村は總出で網を引き親心供木の注連取りかへる供木へ村一本の杉を出し頭張つてアツツ島根の神となり増産に貯金に銃後頭張る氣頭張りを見せてアツツで玉碎しお手料理今日胡瓜もむらしい手作りの昨日も今日も胡瓜もみ

川津山支部句會 (津山)

七月三日

於 津山車掌區 一將報

債券も彈丸もあり賞與金戴いて母はうれしい初賞與誘蛾灯狐の話へ夜が更ける敬禮が窓、窓、窓を埋めて征き軍服の兒に敬禮をくりかへし

川港句會 (大阪)

六月二十日

利美報

君なぞと妻を呼んでる新家庭新家庭兄は家計も尋ねて見旅鴉今日は日本の端に住み旅鴉父母も故郷も捨て、發ち旅鴉木曾路へかかる笠をあげ蚊くすべへ猫も居れず逃げ蚊くすべを焚く都會の客を待ち

蚊くすべを股に土木の假事務所大阪陸軍病院慰問(七月十八日)一億の感謝に答へん兵として病棟の中は感謝に包まれる日本の強さ白衣に感謝する感謝する國だ再起の松葉杖一粒の御飯拜んで子は拾ひ丙種の身も感謝に見るニュース感謝ふと友軍機飛ぶを見つつけ唯祈る言葉少なく見舞ふて來御差遣の御沙汰白衣にある感謝海に空に今日も感謝の陽が沈む

川小郡支部句會 (山口縣)

井蛙報

敵弾も物かわ軍旗突進み鍊成の夏にも負けぬ皮膚の色造船に裏のお山も斧の音進水の船に勞苦を忘れたり撃波の力をこめた船が浮き神風に任せ南へ走る船

川神津支部句會 (大阪)

七月十八日

於 乙平居 香林報

夜店みな一度に閉じる俄か雨殘業の友へすまない夜店の灯賣上げも見せて夜店は錢を置き水槽に片足を借る夜店臺燈管の用意忘れぬ夜店なり忙しさを通つてたのし夜店の灯ビル街のすみで育つた胡瓜です初成りの胡瓜ニコニコ切て來鉢植の胡瓜うれしさいし向ひ手作りだにがい胡瓜も乙なもの花胡瓜もう刺身とも縁を切り早出する夫へ胡瓜刻んどき

増産へ工場の庭に茄子がなり増産の飯へ鉢巻締め直しいも作ることも覺えた隣組増産へ砂の山にも薯を植へ一坪の土地も餘さず飯をいれ稔る頃亭主高へ顔を出し増産の陰に朝顔そつと咲き植木屋にやらせましたと茄子畑大臣に芋屋は芋の講義をし食糧増産馬糞を拾ふ綺麗な手一坪の畑の味を夕餉に見女中から飯の持ち方教へられ坪茄子が出来て旦那も水をやり

川花園支部句會 (大阪)

七月十日

於 木阿彌居 妄夢報

雷に父はラジオを切れと云ひ稲光屋根くくが浮き出され行水に雷鳴つて又涼し雷で配給所へ人が來ず遠雷へ風鈴靜かに動き出し干物へ雷のやつあわてさせ落すのを豫算に入れて買ふ扇扇子にも手さばきのある若旦那吾が影の長さへ女ぎよつとする馬にする十萬圓の薄い下駄召され行く馬へ一家は子の如く行水へ神樂はやしが聞えて來

川西宮支部句會 (西宮)

七月十七日

泉泡報

うたゝ寝へ早い内湯を知らず來大聲が地聲でネと高利貸大聲で唄つて歸る夜の道晴れ姿若き日の母偲ばれる子の寫眞をこすつて見て貰ひ



大阪警察病院川柳會(大阪)

六月二十二日 正柳報

新戦果もうこの地圖で間に合は  
 若草へ地圖を展げて雨となり  
 形式は金一封に爲して置き  
 院號も金一封でつけてくれ  
 金一封坊主一圓ダナと思ひ  
 自轉車屋水枕まで直さされ  
 賣店の娘は只やるやうに出し  
 拾屋の財産死んで記事になり  
 親なく讀む孝經のあじけなさ  
 増産へ百姓獄の光ること  
 百姓に似合はしからぬ槍を持ち  
 百姓の實家があつて贈りもの  
 忠魂の家にふさはし百姓家  
 農科出の息子は理論ばかりいひ  
 耕やすは神代の國に歸る法  
 耕やさうもう上京は忘れやう  
 山があり田があり長男とし生れ  
 うちの田の風に蚊遣は吹消され

大阪通信病院川柳會(大阪)

七月十六日 於圖書室 没食子報

用水の金魚も鱗れ撒かれたり  
 金魚賣大聲出して見たくなり  
 子々孫々榮えてるも法事をし  
 あの時の赤のバンドが眼に映り  
 父の忌に孝足らざりし事を悔ひ  
 水槽の金魚配給されたやう  
 金魚賣一匹まけて水貰ひ  
 金魚掬ひ破れたからも一度追ひ  
 松葉杖の友を上座に法事の灯  
 子が病々金魚の水もそのまんな  
 つれあいの法事喜ぶ年になり  
 喧嘩する様に值切つた金魚死に

ひやかしたばかりに金魚買  
 革帯で剃刀といで叱られる  
 革帯がドロ巻いてる飾窓  
 坊さんの外は法事に浴衣がけ  
 十八九金魚のやうにすれ違ひ  
 革帯を絞めた浴衣が土産揚げ  
 蛇の如くに革帯ほり出され  
 みな揃うて日出度法事なり  
 五年云々金魚どつしり鉢に居る  
 革帯がつつて来る程笑はされ  
 日本刀の重さ革帯ずれてゐる  
 革帯に働く汗が浸み通る

六月 翠芳報

紹介状持つた面會断れず  
 面會の喜び無事な子を眺め  
 面會に嬉しくの子を連れて  
 會はさずに諭す言葉も國の爲  
 面會の妻に激勵して別れ  
 面會は先づ子供から話しかけ  
 訓練日ラツパの音に目をさまし  
 訓練に日曜もなき日が續き  
 訓練に重たい人を運ばされ  
 團長が居て訓練が堅くなり  
 米英を撃つ訓練は玉の汗  
 女の子母に言はれた事を眞似  
 裏町の人情厚いことを知り  
 忠魂に應へ裏町貯金殖え  
 裏町の産業戦士子澤山  
 視察員裏町へ来て暇が要り

七月二十日

棧橋で出帆の後をくやしがり  
 凱旋をして棧橋を強く踏み  
 棧橋の浮渡のんびりと荷揚げをし  
 電報と言はれて胸を躍かし  
 公電を手に万歳を叫ぶ父

市電川柳會(大阪)

翠芳報

もしほ川柳會(廣島)

八月二十一日

於蟻蜂居 翠柳報

制服で滅死奉公國のため  
 見解の相違と制服負けて居ず  
 制服の胸を開いた池の風  
 山道に疲れて寝込む瀧の前  
 山道で脚絆がゆるみちと遅れ

朗詠の聲しずかなり簾ごし  
 勝つまでは見栄を張らない古殿  
 常會へ涼しく揺れる軒すだれ  
 友情のつもりでしたが氣に障り  
 この柄がすきな娘だつた一周忌  
 戦地でもかくや野風呂に虫の聲  
 若鷲も次々翼立つ南北  
 校庭の曇りに負けぬ強い聲  
 死に場所は空だ空だと立つ學徒  
 茶も花も知らぬ女中が先に嫁ぎ  
 戦塵を落して浴衣三歳振り  
 軍服の伴見直す肩の巾  
 勝鬨の南へつゞく瀬戸の海  
 友情の水に万歳かすかなり

八月十三日

於文化協會事務所 ひろし報

忠魂は銃後つゞけと散華する  
 收買に供出競ふ模範村  
 收買にこんなところで顔が合ひ  
 收買の保長と昔なじみなり  
 收買の金支那宿でもあま  
 收買の荷嵩へきつい夕陽さし  
 宿待の洋車にぬるい風があり  
 洋車夫の前身を聞く慢々の  
 洋車代麵が高いと又ねだり  
 産月を洋車大事に乗せて行き  
 まだ去らぬ洋車へ門を堅く閉め

**オムニコン**

本剤は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(適應症概要)

流感、各種肺炎、肋(胸)膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、重傷、其他各科、急性、慢性、炎病性、傳染性、敗血症、並に化膿性膿痰患に對し廣汎に涉り著効を奏す。

(特長)

注射無痛、副作用無、用法簡單、奏効迅速、價廉。

**非特異性全免疫元**

(包裝)

- 二cc管入 二cc管入
- 二cc管入 二cc管入
- 一cc管入 一cc管入

購買元 株式會社黒田藥品商會  
大阪・東京

# 社 關 係 の 人々

## 支 部 と 幹 事

道頓堀支部 (大阪)	萬よし	豊島支部 (大阪)	久米雄
明館支部 (大阪)	最修	三池染料支部 (大牟田)	蝶
梅田支部 (大阪)	帖美	大洲支部 (愛媛)	椋
出雲支部 (島根)	緑之助	小郡支部 (山口)	井
島取支部 (鳥取)	鐵州	熊本支部 (熊本)	水
松江支部 (松江)	祥一路	神津支部 (津山)	香
大鶴支部 (大宮)	柳太	津島支部 (大津)	一
大宮支部 (大宮)	柳太	花田支部 (大津)	安
西條支部 (愛媛)	英賀夫	住吉支部 (大阪)	詩
城南支部 (大阪)	申仙	福岡支部 (福岡)	夢
川治支部 (大阪)	文庫	西宮支部 (西宮)	泉
川野支部 (大阪)	里十郎	布座支部 (布座)	泉
竹原支部 (広島)	芳郎	布座支部 (布座)	泉
尼崎支部 (尼崎)	美知夫	布座支部 (布座)	泉
尼崎支部 (尼崎)	美知夫	布座支部 (布座)	泉
尼崎支部 (尼崎)	美知夫	布座支部 (布座)	泉

生高田米川大沖島	末藤藤藤長長長長	嘉笠片阪大長池	賛助員	主幹
方尾脇村村井谷野山	田亮案孝あ花井五岩	敏亮案孝あ花井五岩	藤原 純生	藤原 純生
敏亮案孝あ花井五岩	田亮案孝あ花井五岩	敏亮案孝あ花井五岩	藤原 純生	藤原 純生

三内藤岩古古古戸石戸大寺岩永西福高橋	不	森藤藤藤藤藤藤藤	不	藤藤藤藤藤藤藤
輪草貴井井井井井井井	朽	里好東	朽	藤藤藤藤藤藤藤
晚郎志友山山山山山山	洞	魚古二	洞	藤藤藤藤藤藤藤

櫻西關押佐布北岩岡丸黒正原中石宮須妹市村	吉仲井吉米西藤橋平大	水谷
川根根谷竹崎施川崎北尾川本水史西曾根白豆秋	田本上田萬儀助美	谷
不山山山山山山山山山山	水葉彦子正川鼻代人花香客風	美

上武谷徳河浪野小飯酒小谷阿岩國篠高月鈴夷植逸逸	多中内清清水清清水	菊杉好
田口永野玲川川尾井尾林萬萬萬萬萬萬	水水水水水水水水	原久
翠香線雅夜之柳恒美與文線風風風風風風	路帆潮園子仙	人

上恩川井新梅唐井岸西巽井加水鹽福福中伊乙岡宮長野田小松福村長水明八河	坂賀村材川田澤野關野無上登川谷詰田下村伊古岡宮長野田小松福村長水明八河	紀好寒博秀朝美須柳望物緒泡
茂川郎浪也溪美須柳望物緒泡	紀好寒博秀朝美須柳望物緒泡	茂川郎浪也溪美須柳望物緒泡

## 募 集

第二十卷 第十一號課題  
九月廿日締切

市場波食子選  
黒川紫香選

第二十卷 第十二號課題  
十月廿日締切

趣味 須崎豆秋選  
丸尾潮花選

一路集の募集課題を履し「近作柳樽」欄一本とする

毎號募集 (毎月五日締切)

近作柳樽 (甘梅) 麻生路郎選  
川柳塔 麻生路郎選  
各地柳壇 (會報)  
文章 (評論研究感想時行漫文漫稿)

### 投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、半紙又は大型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳壇」は全作家の雅號を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
- ▲文章は二十字語原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。
- ▲締切は厳守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格外B別5號  
川柳雜誌 第二十九卷 第九號  
毎月一回一日發行

定 一冊 金三〇錢  
半年六冊 金一四八錢  
一年十二冊 金二九六錢  
外國寄本には海外郵送料實費の加算を乞ふ  
御注文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇)又は小振替を御利用願ひます。御注文は毎月翌日より御指示願ひます。轉居又は改號等の時は最新併記の事。

昭和十八年八月廿五日印刷  
昭和十八年九月一日發行

禁無斷轉載 本誌の刊行は有保  
證新聞紙法に據る

本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社  
廣告部へ御一報下さいませやう。

發行所 川柳雜誌社  
大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地  
電話三三三三

協同出版會  
大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地  
電話三三三三  
振替六六七五〇

★母體、戰線の勇士に送られた方は  
部號名を明示の上本社宛に御申込み  
下されば郵税を奉仕して直接送致し  
ます。

# 健・民・運・動

★生めよ育てよ 皇國の子供  
★健康は生む 一億の底力

— 大政翼賛會大阪府支部 —

力威の水顔美 びきりにと

の等虫京南・蚊・蚤  
! 時いユカで虫毒

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、  
殊に小さいお子達のある御家庭などには殊の外重  
寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので  
大評判の薬です。ニキビや吹出物でお  
困りの方に大きな喜びの糧ノ  
お勸したい薬です!

阪大・京東

館天順谷桃